医師部門 受賞者

川越 正平

医療法人財団千葉健愛会 理事長 あおぞら診療所 院長

地域を「一つの病院」と捉え、包括ケアシステムの構築と地域共生を牽引

川越 正平
Shohei Kawagoe

医療法人財団千葉健愛会 理事長
あおぞら診療所 院長

1991年、東京医科歯科大学(現東京科学大学)医学部卒業。同年、虎の門病院内科レジデント。1996年、虎の門病院血液科医員。1999年、医師3名によるグループ診療の形態であおぞら診療所を開設。2004年、あおぞら診療所院長。2012年、医療法人財団千葉健愛会理事長に就任。2014年度より、松戸市医師会理事となり、松戸市介護保険運営協議会会長、松戸市在宅医療・介護連携支援センター管理責任者(2018年度～)を担当。2022年度より、同医師会会長に就任し、松戸市障害者福祉計画推進協議会会長、松戸市糖尿病・CKD対策推進ネットワーク会議座長を担っている。2024年度より、千葉県医師会理事を併任。その他の役職として、東京科学大学臨床教授(2007年度～)、日本在宅医療連合学会副代表理事(2016年～)。

推薦者 | 伊原 和人　前厚生労働事務次官　　| 松戸 隆政　松戸市長

「地域で医師を育てる」を旗頭に

川越氏は医学部卒業前から、「どうすれば優れた医師になることができるのか」という命題について仲間と議論を重ねていた。その中で「地域の中で医師を育てるべきだ」という考えに至り、1999年に自ら診療所を開設する。学生時代より共に議論を交わした同志3名による、当時では珍しいグループ開業という形態だった。

医師を育てるという理念に加え、地域で慢性期から終末期までの“受け皿”を作りたかったとも語る。「虎の門病院にて初期研修を行う中で、治療を尽くしても終末期を迎える患者さんの“家に帰りたい”という願いに応えられる環境がないことに気づいた。地域での受け皿(医療モデル)を作りたい」と考えたのだ。

地域で診るためには、地域医療の担い手となる医師を育成する必要がある。2003年度から母校の医学生、2004年度からは東京医科歯科大学(当時)や虎の門病院・初期研修医の地域医療研修を毎月受け入れるようになり、現在までにおよそ400名が巣立っていった。これは全国トップクラスの受け入れ実績である。それまで初期研修の2年間は病棟にいることがほとんどだったが、川越氏のこうした実践と働きかけにより、2004年の新医師臨床研修制度からは、地域医療研修の必修化が実現するに至る。

川越氏は2022年度から松戸市医師会会長を務め、在宅医療と介護の連携を主導。地域包括ケアシステムの構築や地域共生の推進に向けて、積極的な取り組みを続けている。

当時研修医だった若手医師4名が集まり、医学生や医師達に伝えたいことを『研修医のための書』として著述した。それが日野原重明先生の目に留まり、『初期プライマリケア研修―初期臨床研修の活用法と臨床的見識について』(医学書院・1994)として上梓された。

地域全体の“かかりつけ医”として

また川越氏は、地域を「一つの病院」と捉えて、臨床現場だけでは解決が難しい地域課題にも取り組むようになる。そのひとつが地区医師会を基盤とした活動である。2016年には医師会から市に提案をした「医師アウトリーチ」が実現する。地域ケア会議で取り上げられた困難事例120ケースについて分析を行ったところ、独居や認知症、医療・介護拒否、ゴミ屋敷、同居の家族も障がい者、セルフネグレクト、8050問題などの割合が高いことが判明した。こうした事例では医師(地域サポート医と呼ぶ)が対象者のもとに赴くことで、背景にある問題(認知症、精神疾患、発達障害、パーソナリティ障害、アルコール等依存症など)を大まかに診立てて、支援の方向性を定める。「医療・介護拒否などの場合も、医師が赴くことで診察を受け入れてくれることは多い」と川越氏。2016年からの10年間で300件超の困難事例を解決。現在、「医師アウトリーチ」活動は全国の自治体に広がりつつある。さらには、大学時代より交流のあった日野原重明先生(聖路加国際大学)が行っていた「いのちの授業」のような取り組みを松戸市でも実現したいと考えていた川越氏は、市内の小中学校に出前講座を行う「まちっこプロジェクト」を2015年度から主導。その功績により、松戸市医師会は「保健文化賞」(2025年)を受賞する。地域全体の“かかりつけ医”たる川越氏の挑戦は、歩みをとめることなく続いていく。